

方形周溝墓の新たな儀礼論のために

福田 聖

一、はじめに

「方形周溝墓は死者儀礼の総体である。」とは、私が以前「方形周溝墓の死者儀礼」（福田一九九五）で述べたところである。現在もその考えに変わりはないが、それまで私が採ってきた民族例等を多用した解釈は、「意味」に代表される内在性を排除して考えたいという姿勢を提示したことから、一旦棚上げせざるをえない事態となった（福田二〇〇〇）。作業の再開のためには、改めて遺跡に残された資料を死者儀礼の痕跡として解釈しなおし、いかにしてその儀礼を復元し記述するかという方法論が必要である。

このような手続きなしに方形周溝墓の死者儀礼について

述べても、おそらくそれは想像の枠を出るものではないだろう。作業の再開にあたり、本稿ではまずその前提となる視点の問題、記述のあり方の問題、そしてその妥当性をいかにして確保するかについて検討することにした。

二、内在的視点と外部的視点

この議論のためには、私が『方形周溝墓の再発見』（以下『再発見』）で示した「内部性の排除」という点についてももう一度考え直す必要がある。そのためには、内部からの視点とは何か、外部からの視点とは何かが示されねばならない。

ここでいう内部とは、共同体の内部であり、経験から導

かれた視点から、「当時」と同一の文脈に沿って記述を進めていると信じて行われるものである。そこでは資料がいわば足し算のような形で歴史を構成するものと捉えられている。たくさんの事例の集積は、一見豊かな多様性を示し、事例の豊かさに対する誤解から、ある段階で解釈の飛躍が行われる場合が多い。代表的なものに青森県青森市内丸山遺跡の調査例から提示された「縄文都市」論、佐賀県吉野ヶ里遺跡や奈良県田原本町唐子・鍵遺跡、大阪府泉南市池上曾根遺跡の見事な環濠や大型建物、区画施設内の機能の違いによって提示された「弥生都市論」を挙げることができる。また別に論じたいと考えているが、ここでは遺跡の示す生活の豊かな様相が、「都市」という全く異なる概念に結び付けられているものの、結び付けられるために必要な「手続き」が豊かさの故に閑却されている。手続きについてはそれにこだわると事例の説明が困難になることから、手続きそのものについての明示なしに議論を進め、全く異なる学問からの概念をそのまま充当する場合がまま見受けられる。考古学が歴史学の資料提供者として下位に置かれたり、出たところ勝負のように思われているのは、この間の手続きが疎かにされる現状があることが方法論を欠いた創造に写り、かつそれがマスコミによって喧伝されているからである。こうした胡散臭さから逃れるために、

方形周溝墓の新たな儀礼論のために

考古学では自前の面倒な手続きを構築する方向に向かわず、これも借り物の数学的処理をはじめとする論理的手続きを志向する場合が多い。この時点で、考古学的手続きは内部から逃れ、外部からの視点により客観的に検討されていると信じられるようになる。

外部からの視点とは他者のものであり、いわば神の視点からの記述である。資料は逆に足し算ではなく、引き算や割り算として扱われ、類型化の末に単純化され要素として捉えなおされる。ここでは「意味」についての判断が停止され、棚上げされる。

こうした数学的な処理は、分析的な装いを持つことからあたかも「真理」や「原理」を示していると考えられがちである。しかし『再発見』でも述べたように、数学によって示されることが必ずしも妥当性の保証にはならない。また分析的であることと、その結果が妥当であることは別の問題である。数学的方法によって証明されるのは、あくまでその対象とした資料、設定した事柄のみに通用する合理性で、個別的なものであり、そこから導かれるものは普遍性ではなく、一般性である。また、数学そのものが分析的判断ではなく、総合的判断の一部に過ぎないという考え方もある。数学を用いていることが、即時に普遍的な正しさを導き出しているのではないことに注意を払う必要がある。

このように数学を用いることは、外部性を保った検討と
は言い切れない部分がある。外部性は先ほど述べたように、
他者の視点からのものであり、問題になるのは視点の位置
である。『再発見』では、一つの例として、型式を絶えず
変容し続けるリゾームのように眺め、土器の文様を非中心
的な関係性として検討を繰り返す谷井彪らの研究を取り上
げた。また、終章において「死」のもつ非対称性、他者で
ある「死」という視点から、共同体がそれを内面化する手
続きとして死者儀礼を行っているという解釈を示した。

だが、このような検討も完全に外部からの検討とは言
いがたい。谷井らの研究も、私の『再発見』における検討も、
記述による言語化という免れ得ない内部性を保持せざるを
得ないからである。何かを書く際には、資料のあるものを
選んで書く、その「選択」という行為そのものが記述者の
「解釈」によって選び取って、意味づけをしている行為と
言わざるをえない。すると、その記述はどうしても内在化
した視点、意味から見た視点からの記述にならざるを得ず、
記述者の視点（パースペクティブ）に左右されることを免
れられないのである。このような記述によって生じる視点
の内在化は、所謂記述負荷性（野家一九九六）と呼ばれて
いるものである。

従って完全な外部からの視点による記述は不可能であり、

ここに記述の客観性の限界がある。しかもこうした記述負
荷性のある言語によってしか、我々の過去の制作は行い
えないことから、内部性から逃れることは叶わないのであ
る。

この意味で私が『再発見』で採ったつもりでいた外部か
らの視点による検討にも限界があるのが分かり、「意味を
代表とする内部性を排除」したと考えた自らの客観性が極
めて限られたものであったことを認めざるを得ない。

また外部、内部という視点を問題とした場合に、前述の
ように双方とも判断を棚上げする部分があることを忘れて
はならない。いわゆる括弧入れと呼ばれる意図的な判断停
止である。内部の場合には手続きが括弧入れされ、外部の
場合には意味が括弧入れされている。ここで行われる括弧
入れはある意味で論理を単純化し、見えやすくするために
必要であるが、最終的にそれが「結論」として持ち越され
てしまい、括弧入れしていることが忘れられて資料のもつ
べき多様性が損なわれている場合が多い。判断を停止した
部分は何か、そしてそれが括弧入れして構成した論理とど
のようにかわるのかを改めて示すべきである。一見、そ
れまで展開していた論を無効にするかにみえるこの行為が、
逆にその妥当性を保障することになるのではないだろうか。

このように内部性を免れない以上、その内部性について

考え、記述のあり方を外部、「神からの視点」に頼らずに行う方法を考えねばならない。その際には資料の「意味」をいかに評価、「解釈」し、その結果として選別した記述を行ったかを明らかにしなければならない。

三、考古資料の記述とパースペクティブ

考古資料を記述するとはどういうことであろうか。われわれは対象とする資料がモノであることから、その記述、例えば口径や底径、胎土の記述は客観的だと思いがちである。しかし、その数値を測る、あるいは含有鉱物を観察する行為そのものがある「意味」に基づき、結果としてそこから生まれる「別の意味」を得るためという目的性があることを念頭に置く必要がある。口径、底径、器高は同一時期に共通する規格性の抽出、あるいは法量の変化による編年の序列化という目論見があることは誰もが認めるであろう。ここでは、「規格」と「編年」という意味づけがなされているわけである。胎土中に含まれる鉱物の観察からは、製作時における粘土の取り扱いを知るといった目的がある。「産地」、「製作」という意味づけがなされているのである。

さて、このように「意味」づけを志向して記述すること

方形周溝墓の新たな儀礼論のために

が避けられないのであれば、この意味づけをするという行為がどのように行われるかが問題になる。この意味は、視点に基づいて与えられ、それは視るものによって異なる。このような視角はいわゆるパーペクティブ（遠近法）と呼ばれる。

考古学におけるモノの記述は、このように観察者、記述者のパースペクティブ性を免れ得ない。従って、絶対的な「客観的事実」の提示は困難といわざるを得ない。

パースペクティブは対象に対するアプローチの方法であり、「観点」「視点」と呼び換えてもいいだろう。考古学で言えば先ほど述べたモノに対してのアプローチの方法とも言うべきものである。例えば、方形周溝墓では底部穿孔壺は儀礼行為の道具立ての一つであるが、別の観点から見れば壺形土器の一つとして型式論的検討の対象にもなる。また、前者においては、出土層位や位置、方台部の盛り土上から出土したのか、周溝の上層で出土したのか、周溝底で出土したのかによって、その出土箇所由来となった儀礼的行為、それによって与えられる道具としての意味も異なってくる。つまり、その資料をどのような視点から見ることによって、意味づけも異なり、意味を際限なく与え続けることができるわけである。

このように見てくると、パースペクティブによって与え

られた「意味」が、先ほど述べた絶対的な「客観性」を持たないものであれば、それを用いて構成される「歴史の出来事」も恣意的で、いわば何でもありでもいいかのような印象を受ける。事実、現在日本の考古学における一部の状況はそうした恣意性に満ちているといわざるを得ない。確かにパースペクティブによって生じさせることができる個々の「意味」は無限にあるかもしれない。しかし、それによって構成される「歴史的出来事」が、パースペクティブの性格から常に変容しつつあるものではあるだろうが、すべてが妥当でないのは当然である。では、その妥当性は何によって確保されるのだろうか。

それは、妥当だとする判断がどのようなものかによることになる。「正しさ」という言葉を用いた場合、一般的に思い浮かべるのは数字による正しさの主張・証明であろう。しかし、分析的だと考えられている数学による証明は、ある設定された事柄、あることの側面、それこそパースペクティブの一部にのみ該当する証明である。前述のように論の正しさを確保するのは、数学的な証明ではないのである。そうすると、逆にその正しさを保障するためには、総合的判断による妥当性が述べられねばならないことになる。蓋然性、確実性の主張によって得られる総合的判断によって妥当性が確認されねばならないのである。

四、論理の妥当性

これまで見てきたように厳密な過去、厳密な妥当性は、絶対的な客観性同様求めるのが難しいようである。程々の過去、程々の妥当性、つまり変化する可能性を常に内包した「過去」の記述を行うしか我々が取るべき道はない。だが妥当だと判断するに足るには、その主張が妥当であることを受容できるレベルが最低限必要になる。こうした受容可能なレベルは、野家啓一が歴史哲学の「物語り」論において、「合理的受用可能性」が「歴史」を「構成」する際の「妥当性」であるとした主張と重なり合うものである（野家一九九六）。この受容可能なレベルがいかに高められるかによってその妥当性の重さも変わってくる。すると問題は、その記述がどのようにして受容可能なレベルの妥当性を主張しているかにかかってくるだろう。どのようにしてとは、どれほど整合性のある手続きを踏んでいるかということである。それによって妥当か否かの判断が分かれる。手続きが、妥当性を確保するのである。それがどのように受容可能なものであるかによって、構成された厳密ではない「程々の過去」が、「歴史」であるのか、それともフィクションであるのかが分けられる。この手続きとはいかな

るものか。

三内丸山が縄文都市だという主張を行うならば、縄文時代の遺構、遺物が、どのようにまったく異なる現代の都市という概念と整合的に接続させるのかという手続きが、その主張が歴史記述であるのか、フィクションであるのかを分ける鍵になるものと考えられる。果たして、そのような手続きは取られているのだろうか。この主張は整合性のある手続き、記述によっているのであろうか。

逆にこうした問いかけは、我々は何をもって様々な論考が提出し、構成する「歴史」を妥当なものとして得心するかを明らかにする必要性を示しているともいえるであろう。我々は何をもって整合性がある論理に足ると考えているのだろうか。

我々が納得できる論文に欠かせないもの、それは十分な資料の提示、そしてそれを説明するのに適当な論理である。いうまでもないが、これは「帰納」と「演繹」に他ならない。こうした論理は、大森荘蔵が示した歴史記述の「適当な実証性」という妥当性の延長線でもある。論理実証主義的な立場とはまた違った意味で実証的であることが求められるのである。

すると、延々と述べてきた内容は単なる回り道に見える。しかし、これまでと異なり、ここに至って我々は単なる

方形周溝墓の新たな儀礼論のために

「帰納」と「演繹」のみでは満足できなくなっている。そこに「充分な」というただし書きが求められるようになっていいるのではないだろうか。この充分さが受容可能なレベルを支えているものである。では、この充分とはどのような「充分」なのであろうか。

私は、ここ十年来「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡」のシリーズで、「総花的」ともいわれる資料の記述を延々と行ってきた。既に別に述べたが、確かにこのような方法は、すぐに「歴史」を構成するような「成果」を生み出さないし、徒勞に見えなくもない。だが、延々と作業を続けることによって、いくつもの点が明らかになってきた。一例を挙げるなら、低地に立地する遺跡では「周溝を有する建物跡」が、古墳時代前期では集落の景観を形作る一つの遺構として、少なくとも埼玉県内では一般的に造られていたことがほぼ確実になってきた。また、それが古墳時代を通して、一部で性格も異なるかも知れないが、継続的に造られ続けてきた(福田二〇〇五a)。また、方形周溝墓においては、周溝の平面形、群構成、土器配置といった各要素が、各時期に複雑に地域性を構成していることを知ることができた(福田二〇〇四・二〇〇七ほか)。

これは、特に華々しい成果ではないだろうし、目を見張るような新しい論理が展開できた訳でもない。しかし、こ

の記述を読んでいただいた読者にはある程度、それこそ「程々」に納得していただけたのではないかと自負している。つまり、こうした納得のためには、充分な資料の提示、自らの視点（パースペクティブ）による資料の記述、そしてそれから乖離しない論理が必要なのである。その論理は数理的なものであることが必要な場合もあるだろうし、そうでは無い場合もあるだろう。しかし、その論理の客観性を確保するために、あるいは普遍性を主張するために数理的な論理が展開されるのであれば、限定された有効性を前提とすべきであるし、独我論に陥る可能性も考慮に入れなければならない⁽¹⁾。それは、ここで納得される「論理」が、前述の「総合的判断」による妥当性を導くことから明らかであろう。

そうした論理の妥当性は、逆にこれまで誰しもが認めてきた考古学の論理にこそ存在していると思われる。考古学の操作概念としてきわめて一般的なのは「型式」である。概念は仮象のものであり、演繹的な性格を持っている。この「型式」という操作概念は、そのリゾームのようなやわらかさから、何も土器のみに限定して適用するものではないだろう。実際これまで続けてきた作業によって、土器等の遺物のみならず、方形周溝墓や建物跡、あるいは集落にまで「型式」が適用できると思えるようになった。その組

み合わせを論じる事によって、考古学の言葉によって妥当性の高い「過去」を「物語る」ことができるのではないだろうか。（福田二〇〇五a）

ここでまた、では帰納と演繹はどちらが優先されるべきかという古典的な問題が生じてくるように思われる。だが、実はそうではない。帰納と演繹はどちらかのみでは、受容可能な整合性のある論理にならない。仮に「帰納」のみを優先するならば、私が『再発見』で示したように決定不能という事態に陥りかねない。帰納法で集めた要素は、それだけでは決して定義に至らない。逆に「演繹」を優先するのであれば、これまで延々と述べてきたような意味の捨象や、資料の持つ多様性を括弧にいれたままにしてしまう恐れがある。

こうした帰納と演繹の関連性については、大塚達朗が山内清男の型式と層位の把握を下敷きに両者の関係について言及した以下の論述が参考になる（大塚二〇〇〇）。大塚は、まず次の山内の著名な「関東北に於ける繊維土器」の一節を掲出している。

「縄紋土器には形態、装飾において種々の変化があるが、一遺物層、又は一貝層から出土する土器はそれ程の変化を示さない。かくの如く一遺物層又は貝層から採集された材料の多数を互ひに比較して見ると、同種の形態

裝飾が認められ、特定の形態裝飾を示す土器も略同じ比例に含まれて居る場合もあり、甚だ異なった形態裝飾をふくむものもある。今この種の材料を相互の異動によって分類しようとするならば、縄紋土器を通じて甚だ多数の標準（型式）を制定せねばならない。

これらの型式は、一地方に於て、殊に關東北に於ては、多数知られて居る。一遺跡でも二三の型式のあるのは普通であつて、往々より以上稀には十以上の型式を出すことがある。一小区域更に一遺跡に多数の型式があり、一遺跡に於て重疊する遺物層に屢々上下別型式の土器が認められることは、諸型式が關係する限りに於て年代的相異を有することを意味する。」（山内一九二九 pp.111~112）

8・pp.111）

大塚はこの中で、「諸型式が關係する限りに於て」という部分に特に着目し、「層位と型式とが、相互にはかを前提として循環すること、層位と型式とは切り離して考えることは實際上出来ないことを山内なりに理解していたことを示していたと捉えるべきである。」（大塚二〇〇〇 pp.156-157・158）と指摘する。そして、この一文を受けて更に「型式と層位は、層位は存在論的に型式に先行し、型式は認識論的に層位に先行し、かつ、相互に他を前提とする」という意味での循環關係にある」（大塚同 pp.156-158・159）と

注目すべき主張を行っている。

同様のことが、ここで挙げている「帰納」と「演繹」、即ち「資料」と「型式」の間にも当てはまるのではないだろうか。個々の資料（遺構、遺物あるいは方形周溝墓と言ひ換えてもいいだろう）と「型式」は循環關係にあると考えられる。従つて、どちらかが優先という關係にはない。

であるならば、やはり先程述べたように作業を進めるべきなのだろう。一つは充分な資料の提示である。資料を選別して、記述すること自体に「意味」の付加があること（記述付加性）を前提にして、それでもできるだけ意識的に資料の部分的な選別を行わず報告のまま提示する必要がある。私が「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡」シリーズなどで、報告書の図版をそのまま使用しているのには、そのような意図も働いている。このような提示の方法は、確かに分りづらい側面があるのは否めない。だが、その一方で見えてくるものもある。そうして見えてきたものが一つの論理として「程々」の説得力を持つものと思われる。「型式」もそうした資料の提示を前提とし、かつ資料との間で相互応答的に「充分」にかつ「程々」に説明可能で合理的なものになると考えられる。

こうした考え方は別に目新しいものではないのかもしれない。先程引いた大塚達朗は別の箇所で「型式学」につい

て次のように述べている。

「要するに「層位学的方法」と「型式学的方法」とを兼ね備えた姿勢で知識のネットワークを駆使して整合的に型式を構成する方面と、そのように構成された型式を図解・例解の役割を果たす標準・標識資料の選定をしなから記述説明する体系を考える方面、その両面を成し遂げる知的作業のことこそ型式論と考える。」（大塚同 57113-16）

大塚の型式論の考え方には、概ね共感することができる。ただ、これは土器の場合の話である。

本稿で対象とする方形周溝墓のような遺構の場合、大塚の文中の「層位学的方法」とはまた異なる意味での困難がある。土器の場合には、「器形」、「文様」といった構成要素が相互の連関をもって同一平面（器面）上に展開し、一つの個体を構成している。これに対して、方形周溝墓は、例えば平面形、断面形、盛り土、埋葬施設といったハード面と、副葬品、使用土器といったソフト面というように、次元の異なる構成要素が数多く入り混じっている。実際に「方形周溝墓と土器Ⅱ・Ⅲ」（福田二〇〇四・二〇〇五b）では、素描ではあるが、各々の要素で共通する方向性が異なり、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期といった時期毎でもその様相が異なることを確認できた。

こうした要素ごとに異なる共通する様相、あるいは相違する様相は、「型式」を制定するのに一見とても不都合のように見える。だが、よくよく考えてみると、土器であれ、何であれ、本来はその範例、掲出した典型例はいずれも同様の問題を抱え込んでいるのである。つまり「型式」という概念は、概念であるが故に定義を伴うものの、一定の幅が前提となっているのである。それは、これまでに延々と述べてきた操作概念としての「型式」の性格によるものである。逆に、ここに概念としての「型式」がもつ有効性があり、それをやわらかな概念として扱える余地があるものと思われる。

では、今後どのように作業を進めるべきであろうか。まずは「方形周溝墓と土器」で見たように、各要素における相同、相違を確認していく必要がある。その上で、その作業を進めつつ有効な重なり合いとしての「型式」を構成する。こうした一見回り道を辿るような手続きを繰り返していくことによって帰納と演繹の結果としての、より妥当性の高い「型式」を制定できると思われる。いわば、方形周溝墓の型式は、何度も重ね描きされることによって構成され、妥当性を獲得していくのである。

構成するにいたった経緯を踏まえつつ、制定された型式を用いることによって、過去の方形周溝墓と現在我々が認

識している資料とを整合的に文脈に配置し、「物語る」ことができる。「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡(八)」でも述べたように、こうした遺構、遺物、あるいは集落、遺跡の型式の重なり合い、重ね書きとして、考古学の言葉によって過去の社会を「物語る」ことが、歴史を「物語る」ことができると考えられる。

そして、こうした妥当性の高い「型式」を下敷きに、初めてその儀礼について論述することができると思われる。

五、小 結

以上、方形周溝墓という資料の取り扱いと、それについて「物語る」有効な論理について、整理してみた。こうしてみると、本稿は表題となんら関係のないように見える。だが、実はそうではない。本稿は、既に冒頭で述べたように、ともすれば胡散臭い論調に陥りがちの儀礼論を、整合性のある受容可能な論理として展開するための構えを示したものである。論を展開する前提なのである。

今後は更に進めて、本稿の内容を受けて、方形周溝墓の儀礼検討のための足場を確保したい。方形周溝墓をこうした帰納と演繹の結果としての「型式」によって「物語る」

ことができたならば、その意味付けによりどのような儀礼を知ることができるのだろうか。どのような方法で、その意味付けを行うことが適当なのだろうか。その意味を体系化、ネットワーク化するためには、どんな方法が必要なのだろうか。

一つには、資料をどのように文脈に置くか、あるいはどのように資料を用いて文脈を構成するかという問題がある。これについては別に、考古学が資料を記述する位相を整理し、どのような文脈を構成しているかについて述べた(福田二〇〇五c)。また、そうした文脈を関連する文化人類学や民俗学、民族学の文脈と重ね合わせるために、そうしたほかの学問における資料を記述する文脈を検討する必要性を説いた。

加えて祭祀考古学、民族考古学、認知考古学といった先行する研究の方法についても、改めて方形周溝墓の検討に有効な方法がないか検討してみたい。こうした作業が、儀礼を復元する方向性を示すものと思われる。

以前に述べたが、死者儀礼は生きている者のためにある。いわば死者という他者へ向けての生きているものからの働きかけなのである。当時の人々は、その死をどのように捉え、どのように悼み、またどのように弔い、別れていくのか、少しずつ明らかにしていきたいと考えている。

なお、本稿は既に二〇〇五年に執筆していたものである。諸般の事情により公になっていなかったが、寺崎秀一郎先生のご高配により本誌への寄稿の機会を頂き、内容的にも是非考古学に限らず歴史学や哲学を専門とされる方に読んでいただきたいの思いから全面的に手を入れて提出させていただいた。是非読者諸氏の忌憚の無いご批判をいただければ幸いである。

(二〇〇五年三月三日記、二〇〇八年一月一四日補訂)

註

- (1) 独我論については、これまでも多くの議論があるが、ここでは柄谷行人がいうような「私が考えているのと同じように他の人も考えているはずだと信じている」という意味で用いる。外部的視点からの検討は「意味」にかかわらないため、一見科学的で、分析的な装いが強く、皆もそれを信じるべきだという命令を意識的にせよ、無意識的にせよ含んでいる場合が多い。それにとどまらず記述を行う際には、既にこの記述を信ぜよという命令がやはり含まれ、独我論に陥る可能性があることを自覚すべきである。

参考・引用文献

- 大森荘蔵 一九九四『時間と存在』 青土社
大塚達朗 二〇〇〇『縄紋土器研究の新展開』 同成社
柄谷行人 二〇〇四『定本 柄谷行人集』 トランスクリティ

ク』 岩波書店

野家啓一

一九九六『物語の哲学―柳田國男と歴史の発見』 岩波書店(のちに増補版が現代新書として刊行)

一九九八「I講義の7日間 歴史のナラトロジー」

『岩波新・哲学講義8 歴史と終末論』 pp3~76 岩波書店

福田 聖

一九九六「方形周溝墓の死者儀礼」『関東の方形周溝墓』 pp395~412 同成社

二〇〇〇『方形周溝墓の再発見』 同成社

二〇〇四「方形周溝墓と土器Ⅱ―概観その1―」

『研究紀要第一九号』 pp133~168 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

二〇〇五a「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡

(8)」『埼玉考古第四〇号』 pp25~44 埼玉考古学会

二〇〇五b「方形周溝墓と土器Ⅲ」『研究紀要第二〇号』 pp57~76 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

二〇〇五c「方形周溝墓における資料の記述と文脈」

『方形周溝墓研究の今』 pp251~277 雄山閣出版

山内清男

一九二九「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌 第一卷第二号』 pp1~40

付記

考古学における客観性については、福田敏一氏が「考古学における客観性とは何か」と題して詳しく論じられている。また稿を改めて言及したいが本論と重なる部分も多いため併読をお勧めしたい。(『考古学という現代史』 pp6~66 一〇〇七 雄山閣出版)